

—平成23年度 西治地区ほ場整備事業に伴う発掘調査—

西治下代ノ下モ遺跡

2012

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会



— 西治地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

西治下代ノ下モ遺跡

2012

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会

本文目次

あいさつ・例言	2
西治下代ノ下モ遺跡発掘調査報告	
第1章 周辺の地理・歴史的環境	4
第2章 調査経緯・記録	
第1節 調査に至る経緯・調査方法	5
第2節 発掘調査・整理作業日誌	5
第3章 調査報告	
第1節 (1) 基本層序 (2) 遺構	5・7
第2節 弥生時代の遺構・遺物	7・9
第3節 古墳時代の遺構・遺物	9・11・13・15
第4節 中世以降の遺構・包含層遺物他	15・16
まとめ	16・17・18
遺物観察表	22・23

図版目次

図1 福岡町位置図・調査場所位置図	3
図2 調査橋所位置図	6
図3 調査配置図	6
図4 確認調査 土層図	6
図5 基本土層図	6
図6 調査区全体平面図	8
図7 調査区西東側土層図	8
図8 弥生時代の遺構図	10
図9 古墳時代の遺構図	12
図10 SK07土層・出土状況	14
図11 SK07出土土器の接合状況	14
図12 掘立柱建物跡・他ピット	14
図13 弥生時代・古墳時代遺物	19
図14 古墳時代遺物	20
図15 SK07・包含層遺物ほか	21

写真目次

全景 (南側より) / (東側より)	(1)
B・C区垂直写真/重機後の精査/確認トレンチ4	(2)
C区暗渠土層/ABC区土層/A・B区検出/SH01検出状況	
SH01土層	(3)
SH01土層/不明土師質検出/完掘/出土須恵器	(4)
SH02/05検出/土層/SH03検出/露出土	(5)
SH03土層/完掘/土坑/SH04出土状況/完掘/SK06	(6)
SH01遺物出土状況/SK07出土状況	(7)
SK08出土状況SH09土層/完掘/出土状況/A区掘立柱建物跡	(8)
弥生/古墳時代遺物	(9)
古墳時代遺物	(10)
古墳時代/全体	(11)

地 図

調査箇所	所在地	地図番号
西治下代ノ下モ遺跡	兵庫県神郡福崎町西治669番1	1

あ い さ つ

埋蔵文化財は、地域に埋もれた歴史を伝えてくれる大切な資料の一つです。

平成21年度より西治地区の大規模なほ場整備事業に伴い、発掘調査を中心に実施し平成23年度で終了しました。

今回の調査で西治地区において弥生時代後期・古墳時代中期の集落跡を発見することができました。今まではやや高台に位置する数ヶ葉古墳や円光寺山古墳、高橋古墳群が存在し、古墳時代に古墳が造られた時代のイメージが先行し、これらを抱うふつうの人々の生活に焦点がなかなか当たらず、歴史の教科書で習うだけの出来事のように感じる人が多いと思います。今回の発見においては、ご飯を蒸す甗、魚を釣る土銚、塩が持ち運ばれた製塩土器などふつうの日々の暮らしの様子が見えてきました。

これらの小さい成果である資料をまとめることによって地域のことを知る大きなピースとして地元の方に大切にさせていただけるよう今後の活用という形で多くの方々に古代に思いをよせ、子どもたちの学習や地域へのアイデンティティや愛着心につながるとう幸いです。

調査にあたり、工事関係者の方々の理解と共に地元自治会等にご協力を得ました。厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

福岡町教育委員会
福岡町教育長 高寄 十郎

例 言

1. 本書は、平成23年度に西治地区のほ場整備事業に伴い工事により削平されるため、西治下代ノ下モ遺跡の本調査を実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県中播磨県民局から福岡町へ依頼を受け福岡町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費について本調査は、原因者（兵庫県中播磨県民局）負担により実施した。
4. 調査体制は以下の通りである。

平成23年度

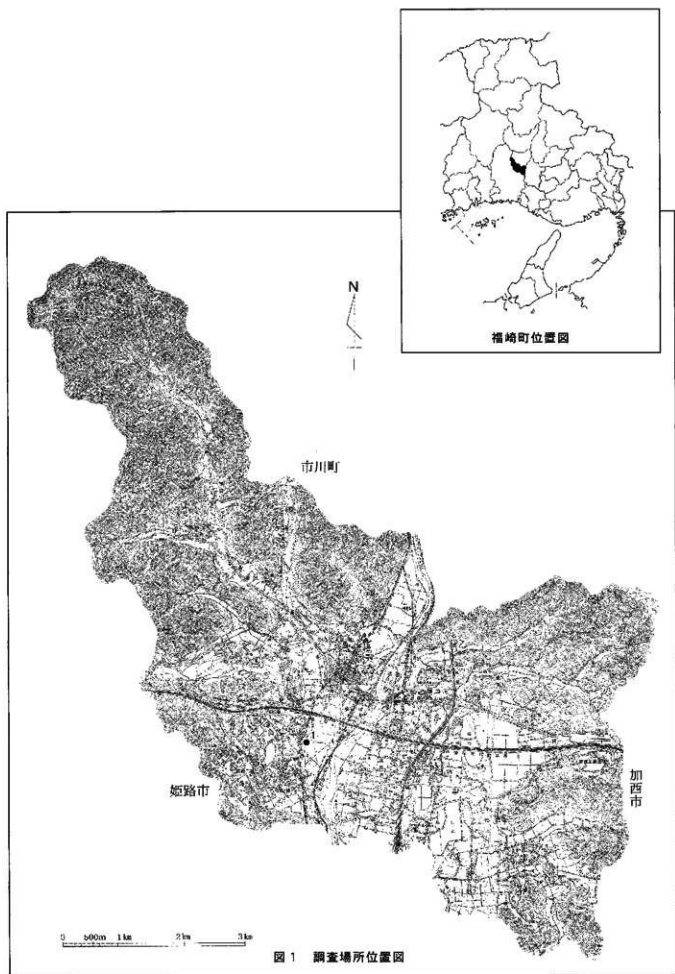
調査・整理事務局

教 育 長	高寄 十郎
社会教育課長	山下 健介
社会教育課係長	吉川 利彦
社会教育課主事	林 彰彦

整理作業・報告書担当

文化財専門員	古田 陽
整理作業員	梶 智美

5. 挿図中に使用している方位は基本的に磁北を示している。
6. 本書の執筆は古田が行い、編集も行った。
7. 遺構図・トレース・遺物実測・写真は古田が撮影した。遺物の洗浄・接合・復元・遺物製図等は梶の協力を得た。
8. 現地調査作業には下記の方の協力を得た。（順不同・敬称略）
空中写真撮影（フジテクノ有限公司）、重機（藤澤工業株式会社）
松岡正夫、内藤隆夫、隅岡弘、藤木茂己、梶智美、村上由希子、西治区長、産業課
堀本裕二・福井優（姫路市教育委員会）
9. 整理作業等に関して下記の方の協力を得た。（順不同・敬称略）
梶智美、松岡正夫、内藤隆夫、神崎郡歴史民俗資料館、福岡町産業課



第1章 周辺の地理・歴史的環境

福岡町は、兵庫県中央部よりやや南側に位置し播磨平野の北西部の一角を占めています。当町の東側には、加西市、西及び南側には、姫路市、北側には市川町が隣接する。

地理については、中国山地のほぼ東端で位置し南北横断したに大きな深い谷の市川・円山川の沿い南側の低地に展開する。町域では播磨山地を源にもち福岡町域を南流する二級河川市川は、福岡町を東西に2分割するかのよう流れ、その周辺には、谷底平野、河岸段丘が発達する。谷底平野は、市川に流れ込む各小河川が関連し活断層として知られている山崎断層に沿って東流し播但線を越えた辺りから南流し西治川と合流して市川へと注ぐ。

調査地の西治地区は、町域の西南側に位置し、地形区分上は、七種川や西谷川の氾濫原となる部分で低位氾濫原と位置づけられる。現在の集落は、段丘面に位置する。

西治地区での発掘調査成果は、平成15年度図書館建設の際に西治二反田遺跡が確認され、弥生時代から中世にかけての遺物が出土し、周辺の微高地状地形に遺跡が広がることが分かった。この他には、南側に古墳時代後期の小田墳が円光寺山古墳、円光寺山西古墳、後期前半の三味谷1・2号墳のように横穴式石室を埋葬施設としない古墳が尾根上に築かれた盛上墳、木棺直葬墳の事例として数ヶ所古墳が存在し耳環、土鏃4点や石製紡錘車などが見ついている。古墳の存在は知られているが、集落遺跡は見つかっていなかった。西治地区に隣接する南側の高橋地区では、古墳時代中期後半の高橋古墳群は箱式石棺を埋葬施設とする古墳から鉄剣が出土している。また奈良時代の祭祀に伴う遺跡と考えられる楡谷遺跡などが知られており、西治地区を考える上で重要である。

西治は、古くは、“再地”と言われており、中世の南北朝期には、“さいち”という地名が、『広峰文書』や『肥塚文書』に見られる。(注1) 西治には、八幡神社が、西谷に大歳神社があり、寺院としては、永享2年(1429)に赤松満祐の祈願所として天台宗宍喰山観音寺が創建された。また、円蓮上人が書いた原稿の一部が伝存する円蓮宗蓮華寺がある。(注2) 近世には、豊臣氏が蔵入地とし、慶長5年(1600)から姫路藩の領土となり、寛永年間頃に、西谷村が西治村から分村した。明暦4年(1658)の西治村の明細帳から、村の石高が隣接村より比較的大きく、人口も456人とかなり多くみられる。また江戸中期全国的にも新田開発が激増し、小字名として残る例も多く西治も同様に残る。(注3) 寛延3年(1750)の明細帳には、畑作物の種類が豊富になり、肥料に下糞や金肥が用いられていることから貨幣経済の浸透が窺える。また日雇いとして、姫路城下への薪売りをしており(注3)、人の往来も想定できる。

- 1 田中 眞吾 1974 「1. 地形区分とその性状等の概要 『土地分類図付属資料(兵庫県)』平成3年10月復刻財団法人山本地図センター
- 2 田中 眞吾 1990 「1 福岡町の地形・地質図とその説明 『福岡町史』第三巻資料編Ⅰ 福岡町史編集専門委員会編
- 3 田中 眞吾 1993 「市川の河岸段丘 『広報ふくさき』NO.256 昭和63年3月「市川の段丘はなぜ、東岸に多いのだろうか」 『広報ふくさき』NO.320 福岡町広報委員会
- 4 須崎 徹一 1991 「3 経済・社会の変貌と福岡町 『福岡町史』第四巻資料編Ⅱ 福岡町史編集専門委員会編
- 5 松本 正信 1989 『福岡町史』第三巻資料編Ⅰ 福岡町史編集専門委員会編
- 6 兵庫県教育委員会 2008 『土師Ⅰ・Ⅱ遺跡』
(注1: 1989 『角川日本地名大辞典28 兵庫県』 株式会社角川書店)
(注2: 1965 『地志 播磨編(復刻版)』兵庫県教育委員会図書販売株式会社)
(注3: 1990 『福岡町史 第二巻本文編Ⅱ』 兵庫県福岡町) / 字源図(人正15年改訂 地籍地図参照)

第2章 調査経緯・記録

第1節 調査に至る経緯・調査方法

平成22年度に西治地区のほ場整備に伴う試掘調査を実施し、新規に西治下代ノ下モ遺跡を発見した。ほ場整備に伴い遺跡が消滅する恐れがあり、平成23年度に範囲の詳細な確認調査を行い兵庫県中播磨県民局と委託契約を福岡町教育委員会が結び、本発掘調査（平成23年7月21日～9月8日、発掘作業25日間）を実施し詳細な記録を行い、発掘調査報告書をまとめ作成した。

調査に即して調査地点は、田畑に囲まれており、作業以外での進入を防ぐため周囲を杭により囲み、安全対策を行った。調査については、重機による表土掘削後、詳細な掘削部分については人力掘削により調査し、終了後は重機により埋め戻し転圧を行った。

調査記録には、基準となる座標が平成21年度に西治地区ほ場整備の事前に行った基準点測量の3級基準点（世界測地系）の座標を使用し産業課からレベルと光波測量器財を借用し、全体図、杭等を取り、適宜詳細図が必要な部分については、手実測で1/20または1/10等で行った。調査の遺構番号については、調査時のまま利用し、S番等で遺物を取り上げている。住居跡内の柱穴については、北西隅を1番とし時計回りに番号を振っている。

第2節 発掘調査・整理作業日誌

7月21～26日	重機による掘削作業。
7月22～29日	人力掘削開始、全体精査。
8月1～5日	包含層掘削終了、全体精査。
8月1日	SH03甕見つかる。
8月9～19日	遺構検出掘削、出土遺物図面作成。
8月10日	SK07上器破片見つかる。
8月17日	SK07石柱取り外し終了。
8月22日	前日の夕立により雨水の排水作業。
8月23日	暗渠下部の掘削終了。
8月24日	前日の夕立により雨水の排水作業。空掘。
8月25～26日	重機による埋め戻し。
～9月8日	現地測量等。
9月8日	整理作業、遺物洗浄・接合準備。
10月	遺物の接合・遺物復元。
11月	遺物の実測・観察表・遺物トレース。
12月	遺物接合・復元・文章等。
1月	遺構図の図版関係・遺物写真・文章等。
2月	遺物復元作業・校正等。
2月7～21日	福岡町立図書館ギャラリー内において展示。

第3章 調査報告 第1節 (1) 基本層序

1層 茶褐色砂質土層（耕作土）	6層 暗褐色やや粘質土層（遺構）
2層 黄色粘質土層（床土1）	7層 明茶色やや粘性砂質土層（無遺物層）
3層 灰褐色粘質土層（旧耕作土）	8層 淡茶色やや粘性砂質土層
4層 黄色粘質土層（床土2）	9層 淡茶砂質土層
5層 暗茶色やや粘質土層 （鉄分沈殿層・包含層）	10層 青灰シルト質土層
	11層 黄色粘土質層

基本土層は、上から順に、耕作土（主に水田、または畑）、その下層に水田の床上とみられる整地層（不透水層）がある。そして、その下部にも旧耕作土、旧床土と繰り返される。

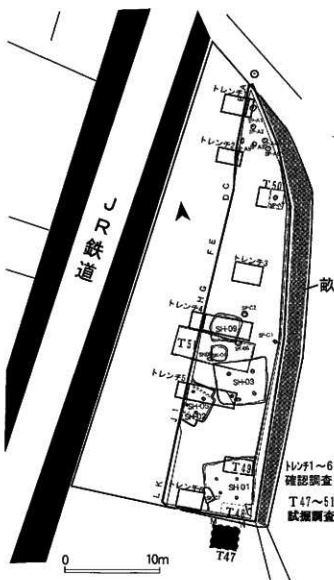


図3 調査配置図 (1/400)

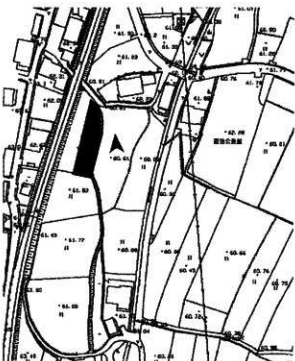
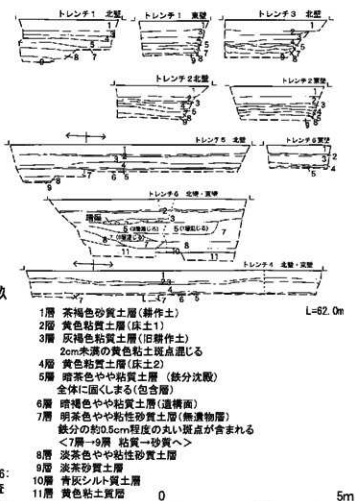
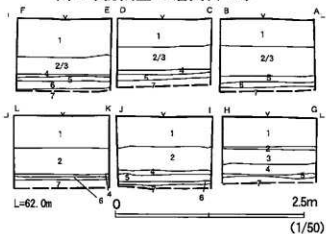


図2 調査箇所位置図 (1/1500)



- 1層 茶褐色砂質土層 (耕作土)
- 2層 黄色粘質土層 (床土1)
- 3層 灰褐色粘質土層 (旧耕作土)
2cm未満の黄色粘土斑点混じる
- 4層 黄色粘質土層 (床土2)
- 5層 暗茶色やや粘質土層 (鉄分沈殿)
全体に固くする (包含層)
- 6層 暗褐色やや粘質土層 (遺構面)
- 7層 明茶色やや粘性砂質土層 (無遺物層)
鉄分の約0.5cm程度の丸い斑点が含まれる
<7層→9層 粘質→砂質へ>
- 8層 淡茶色やや粘性砂質土層
- 9層 淡茶砂質土層
- 10層 青灰シルト土層
- 11層 黄色粘土質層

図4 確認調査 土層図(1/100)



- 1層 茶褐色砂質土層 (耕作土)
- 2層 黄色粘質土層 (床土1)
- 3層 灰褐色粘質土層 (旧耕作土)
2cm未満の黄色粘土斑点混じる
- 4層 黄色粘質土層 (床土2)
- 5層 暗茶色やや粘質土層 (鉄分沈殿)
全体に固くする (包含層)
- 6層 暗褐色やや粘質土層 (遺構面)
- 7層 明茶色やや粘性砂質土層 (無遺物層)
鉄分の約0.5cm程度の丸い斑点が含まれる
- 8層 淡茶色やや粘性砂質土層

図5 基本土層図 (1/50・1/100)

耕作土は、現代の耕作面で旧耕作土中には、中世代の遺物が含まれ1・2・3世紀代の耕作面と考えられる。そして5層の鉄分沈殿層～6層中に土器片が多く含まれ、古代、古墳、弥生時代の遺物が見つかる。周辺の試掘調査の結果から旧耕作下には、砂粒子の砂層または10～15cm弱の川原石が入る層があり、最下層には青褐色砂質土が堆積し、下から水が湧き出る。

(2) 遺構概要

竪穴住居跡5基・掘立柱建物2基・土坑3基・祭祀土坑1基・その他ピット
(遺構略) SH=竪穴住居跡, SK=土坑, SB=掘立柱建物, PIT=柱穴, その他穴

第2節 弥生時代の遺構・遺物<SH02, SH09, SK04, SK06, SK08> <SH02> (図8・図13)

調査区C区の西側に位置し5層掘削後に遺構を検出した。また確認調査トレンチ5でも遺構を確認していた。検出時には遺構ラインが、やや不鮮明で一つの住居跡であったが不自然な形のため、東西、南北にサブトレンチを入れて深さの確認を行った。確認トレンチ5では、調査区に設定した部分より西側で埋土状態が異なり遺構面の6層が削平されており、土地利用が異なり耕作土半分が大きく削平されており調査区西側には遺構は拡がっていない。

遺構の規模は、約4.6m×約4.6mの隅丸方形を呈し柱痕は確認できず、遺構は30°傾き、埋土は、約20弱cmである。埋土状況は、全体に白っぽく砂地が入りSH05に削平されており遺構内部の様子は不明で、周囲内外ともに支える柱など見つからなかった。

遺物については、器種の特定できないほどの小片が出土しているが、弥生時代後期～末期と考えられるものが多く含まれる。1の製塩土器の破片は、0.1cm程度の非常に薄い器壁で古墳時代のもので混じりと考えられる。2～4は、底部片で外面に右上がりのタタキを施し丁寧に作られている。5の砥石はどの面も磨られた痕跡が残る。

<SK04> (図8・図13)

SK04は、調査区C区の北側に位置し5層除去後に検出した。遺構の規模は、約1.6m×約1.6mの隅丸方形を呈し、遺構周囲内外ともに柱痕跡は確認できなかった。遺構は、ほぼ正位で埋土は、非常に薄く中心部分が深くなっている。埋土は、炭混じりの粘土質土である。これらの土坑からは、破片主体で弥生中期の口縁部片から後期底部が出土している。

遺物については、図化した遺物のみで非常に遺物の量が少ない。断面状に遺物が挟まって出土した。9の壺の底部片は、外面が丁寧に磨かれていた。10と11は、他の土器片と異なり明橙色でやや硬い。他地域の搬入品である可能性が高い。10は、口縁部は大きく外反し、外面に細かい単位のタタキが施される。遺物は、弥生時代中期、後期の遺物が混在して出土した。

<SH09> (図8・図13)

調査区B区の南側よりに包含層5層除去後に検出した。遺構の規模は、約2.8m×約3mで隅丸方形を呈し、ほぼ正位で遺構の埋土1層からは、多くの土器片が見つかったが、床直の遺物は1点だけである。また土器片は、胴部や体部の小片が多く、口縁部の破片が非常に少ないのが特徴的であった。

遺物の時期はややばらつきあり、出土状況は1層中の遺構内の外縁に遺物が集中して見つかり、中心部分には遺物がほとんどない特徴が見受けられた。遺構の機能が終了後に外側から土器を廃棄する場所となっていた可能性がある。住居跡としているが、機能時の様

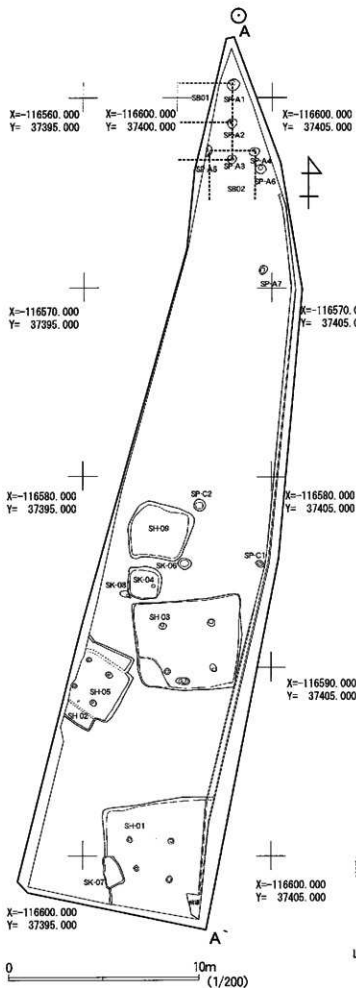


図6 調査区全体平面図

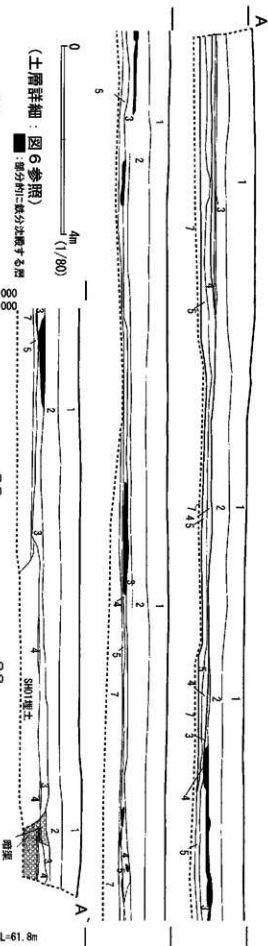


図7 調査区西側土層図

子が窺えず、遺構周辺内外ともに柱痕跡等も確認できなかった。規模も他のものとは異なり簡易な建物である可能性がある。遺物については、12、13は口縁部が外反し、内面ケズリが見られる。14は、粗製の把手と考えられる。15は体部片で胴部最大径は張らず、内面にケズリを施す。胎上の粒子がきめ細かい。16は床直で見つかった小鉢である。胎土は、全体に白っぽく、粒子が細かい。出土状況からは上部から押しつぶされたような状態で出土し、ほぼ完形に近い破片が揃っていた。時期は、弥生時代の末期から古墳時代初頭のものと考えられる。

<SK06> (図8)

調査区C区のSH09の南側に位置し5層除去後に検出し、中心に高坏の脚部のみが立脚した状態で残り、隣には白色の弥生土器片が交えており、丸くて扁平な石2点が土坑の周りを抑えるような状況で出土した。土坑の規模は、約60cm×約40cmである。遺構の時期は、弥生時代後期と考えられる。出土した高坏には轆に転用されたような跡はなく、2個体の石も加工等の痕跡も一切ない。また高坏の上部の坏が完全になく削平された影響と考えられ、高坏を埋納した土坑の可能性も考えられる。

<SK08> (図8)

調査区C区のSK04の西側に位置し5層除去後に検出し、遺物の上部が既に見えていた。埋土は全体がやや柔らかく、土器の下部の埋土はやや硬く締まっていた。接合状況から2個ともに上部が欠損しているおり、遺構全体の上部が削平されていると考えられる。また土坑の断面が逆台形のような形をしており、本来は木の柱を支える穴として利用していたものを抜き取りその後廃棄された可能性がある。

また遺物は削平に伴い上部の力が加わり掘えられていたものが横倒しに転倒した可能性が窺える。土坑の規模は、約40cm×約35cmである。遺構の時期は、弥生時代末期から古墳時代初頭と考えられる。

遺物については、2点のみである。19は胎土が白く、外面は間隔の狭く細かいタタキが施され、全体に指でナデ押さえて調整している。20は、やや明るい橙色でやや硬く丈夫な土器で底部を焼成後に内側からわざと孔を開けたような部分が残る。

C区PIT (図8・図13)

<SP-C1>規模は、40cm×30cmで深さ約15cm残存していた。埋土断面に灰褐色が顕著に含まれる土があったが、埋土中に遺物等は見られなかった。

<SP-C2>規模は、60cm×50cmで深さ約10cm残存していた。甕の底部片が見つかった。時期は、弥生中期のものと考えられる。

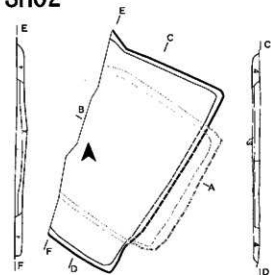
第3章 第3節 古墳時代の遺構・遺物<SH01・SH03・SH05・C×ピット1-2>

<SH01> (図9・図13)

調査区C区の南側に位置し4層下より検出した。

調査区南端に近い部分には、東西を貫く暗渠上部に被っており、暗渠上部埋土中には近代から江戸後期、下部には中世代と考えられる小さい土器片があり、暗渠自体は江戸時代後期より以前のものであると考えられる。また確認調査トレンチ6では遺構は見つからず、またSH01の西側、試掘トレンチ47の南側には遺構は拡がらない。調査区の東側に至っては、畝を挟み田畑の耕作面の高さが調査区より約1m低くなっている。今回のほ場整備では盛土工事のため影響ない。

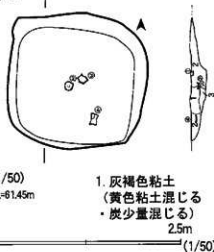
SH02

(1/80)
L=61.45m

1. 暗黒褐色粘質土 (炭まじる) → (SH05)
2. 暗黒灰褐色砂質土 (鉄分混じる) → (SH05)
3. 暗灰褐色砂質土 → (SH02)
4. 暗黒灰褐色粘土 (鉄分多く混じる) → (SH02)

0 4m (1/80)

SH04

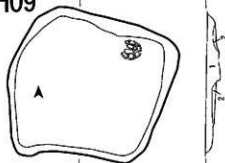
(1/50)
L=61.45m

1. 灰褐色粘土 (黄色粘土混じる・炭少量混じる)
2. 暗灰褐色粘土
3. 黒褐色粘土

①~④土器

0 2.5m (1/50)

SH09

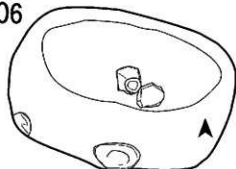
(1/80)
L=61.5m

1. 暗茶褐色粘土 (鉄分全体に混じる・炭混じる)
2. 黒褐色粘土

(1/10)

L=61.45m

SK06



L=61.55m

1. 暗灰色粘質土 (マンガン少量混じる)

(1/10)

SK08



L=61.55m

1. 灰暗褐色砂質土

(1/10)

0 50cm (1/10)

SK06



18

SK08



19



20

(1/4)

C区

SP-C1



SP-C2



1. 暗灰褐色粘質土 (鉄分が多く含まれる)
2. 灰褐色粘質土

L=61.55m

1. 暗灰褐色粘質土 (鉄分が多く含まれる)

0 1m (1/20)

図8 弥生時代の遺構 SH02/SH09/SK04/SK06/SK08/C区と土

まず、上層状況の確認のため東端の土層破端に溝状サブトレンチを入れ、土層、遺構の深さを確認した。SH01は、試掘トレンチ49と被る部分あり、サブトレンチを南北方向に先に入れ、遺構の深さを確認しながら掘削し、東西方向のサブトレンチを入れ、SK07を確認し、南側の暗渠下部を掘削し、南側の遺構を掘り下げていった。SH01周辺には柱穴等確認できなかった。

遺構の規模は、約6m×約6mの隅丸方形を呈し、柱穴が4基直径約30cm、深さ20cmで柱痕は確認できなかった。遺構は、10°傾いている。住居内の内部構造の壁溝、カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。遺構全体の平面の状況では、隅丸方形の北東側隅に炭が多かたまって見つかリ、また住居跡の中心からSK07の近い部分に向って、小さい柱状の棒状で炭を検出したが、大変もろく写真・図面等の記録化が非常に難しい状態であったため、位置情報のみになるが、範囲を抑えている。これらの様子からは、大量の炭などが埋土中に多く混じらず焼失住居の可能性はやや低いと考えるが、住居の部材を一部については焼き払い、他の屋根部材等は転用している可能性も考えられる。

SH01の南側の中心部分の床直に特殊な遺物を発見した。その遺物は、原形を一部とどめていないようで約60cm×約15cm弱のまな板状平面形をした土師質で厚みは磨耗しているため不明であるが、残存の厚みは約1cmであった。土師質の色は、火を受けてやや赤く変色している。この遺物は全体にヒビが入っていたが、土師質片が磨耗して塊状になっただけではない。

発見当時の姿が本来の形や使用用途に近いと考えられる。この遺物が見つかった南側から大量の薄い製塩土器の破片が見つかった。もしかすると、製塩土器を再焼成の行為に密接に関係するまたはカマド内部の構造が一部残存した可能性もある。遺構の時期は、床直遺物をこの住居跡の時期とし、古墳時代中期中葉から後期後半とする。

遺物については、遺構全体に疎らに遺物が入っており、遺物がほとんどない。全体像の分かる土器片は少なく、破片のうち口縁部や底部がほとんど無く、胴部片が多いのが特徴である。そしてSH03半分残っている36の甗の破片と接合可能な遺物が土層の1層から見つかっている。またSH05の破片との接合関係の分かるものもある。これは、SH01、SH03、SH05ともに遺構が機能していた時期または廃絶時と同じ頃である可能性が非常に高く、遺構の傾きもよく酷似している。

床直の遺物より古墳時代中期中葉のものと考えられる。21は、上層1層中から見つかリ、蓋の上下が逆さまの状態で見つかった。21の須恵器は、口径の形も非常にきれいで薄く、丁寧に作られており、須恵器内面の色はやや赤い。他には坏類の破片が多く見られたが図化できるものは、24、25の2点のみであった。口径と胴部最大径が同径のもので、そこは丸底と考えられる。22、23は、製塩土器で、内外面ともに指ナデが多い。

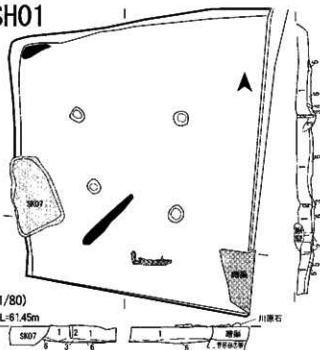
手づくねで非常に器壁が薄い。他にも図化できないほど細かい破片が多く胎土も異なるものが出土している。26、27、28は、SK07と接合関係があり、26は、外面の口縁部が朱で塗られている。

<SH03> (図9・図14)

調査区C区の西側より5層直下で検出した。遺構の規模は、約5.4m×約4.8mの隅丸方形を呈し、柱穴が4基直径約30cm、深さ20cmで柱痕は確認できなかった。

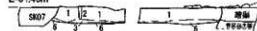
遺構は、10°傾いている。試掘調査51と被る部分が一部あり、遺構全体の形が見えていたため、中心から東西・南北にサブトレンチを入れて、埋上状況を確認した。埋土は、非常に薄く約10cm程度で2層しか分層できなかった。特徴的なことは、1層中に中心か

SH01

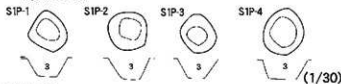


(1/80)

L=61.45m

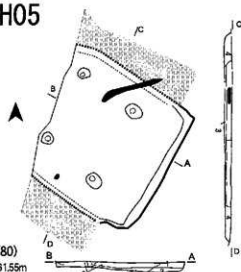


1. 黒褐色粘質土
 2. 黄色砂質土
 3. 灰粘質土
 4. 灰粘質土 (炭混じる)
 5. 暗茶褐色粘質土
 6. 暗褐色砂質土 (黄色砂質土混じる50%)
- 暗渠：灰褐色粘質土



(1/30)

SH05

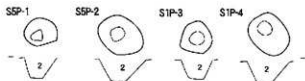


(1/80)

L=61.55m

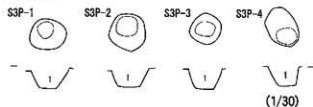
1. 暗黒褐色粘質土 (炭まじる) → (SH05)
2. 暗黒灰褐色砂質土 (鉄分混じる) → (SH05)
3. 暗灰褐色砂質土 → (SH02)
4. 暗黒灰褐色粘土 (鉄分多く混じる) → (SH02)

L=61.45m



SH03

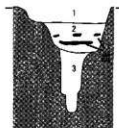
(1/30)



(1/30)

L=61.45m

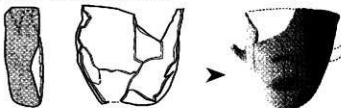
1. 暗茶褐色粘質土 (土器片・炭混じる)
2. 暗灰茶褐色粘質土 (炭が堆積・土器片)
3. 波黒褐色粘質土



(1/80)

L=61.45m

1. 暗褐色粘質土
2. 暗黒褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土 (黄色砂質土まじる)



SH03甕出土状況

(1/10)

図9 古墳時代の遺構 SH01/SH03/SH05

ら四隅に向って棒状の炭と検出したが、状態が悪く、写真に記録できていないが、図面上に点を抑えている。住居跡の遺構については、4つの柱穴を確認し、他のもう1基南端の中央部分の土坑を見つけた。このS3P5の土坑からは、炭が大量に積み重なって見つき燃料庫または、燃えかすを集めていた可能性もある。ここからは、甕の分厚い底34が見つかっており、匙のように炭を掬うような道具として二次利用していた可能性がある。床直構造は、南西隅に少し高まりがみられた。

遺物については、1層中で横倒しになった状態で半分の甕の36が残っている。甕の持ち手部分が1個しか残っておらず、半分は丸々欠損しており、削平された際に失われた可能性が高い。この甕の口縁部片がSH01出土のものとの接合関係が見られる。36は全体にバケツ状の形を呈し、他の土器片とは胎土が緻密で丈夫で硬くやや薄い茶褐色で、外面の調整もハケで強く抑え込んだようなタタキに似ているような調整である。在地のものだけでなく、搬入品と考えられる。その他の遺物は、少なく図化を行った程度である。29、30は、甕の口縁部片である。31は、粗製甕の把手の一つで磨耗が激しく36の甕とは異なり別の甕の把手であると考えられ、別個体の存在を示唆する。35は、甕の底部片で内面には同心円状、外面は網状のタタキが施されている。37は石匙と考えられ、一部窪みが見られる。38は、磨製で表面全体につるつるとしており、具体的な用途は不明であるが、紐を巻いたような筋が残る。39は両端がやや窪み持ち手部分と考えられる。時期を示す床直の遺物がないため、出土遺物から加味して古墳時代中期中葉から後期後半と考えられる。

<SH05> (図9・図14)

調査区C区西側で5層除去後に遺構検出し、SH02と遺構が被って見つかった。規模は、約3m×約3mの隅丸方形を呈し、約30°傾き、埋土は、約15cm弱である。住居内の遺構は、4つ柱穴が残り、径約25cm弱である。P4の中には細かい2cm前後の丸い川原石が含まれていた。P4とP3の間には、一部南端中央に火を受けて赤い焼土部分が残っていた。調査区西側部分については、確認調査のトレンチ5より遺構が削平されていることが分かっている。遺物は非常に少なく、40・41は甕の口縁部片、42は底部片が見つかる。43の破片が床直に近い部分から見つかっており、この遺物の時期を遺構の時期とし、古墳時代中期とする。

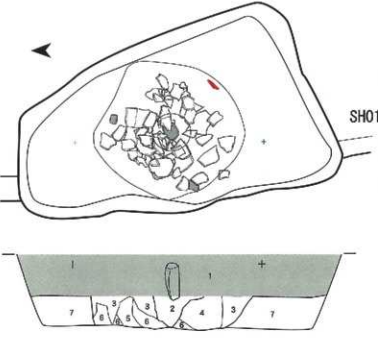
また40・41の土器片は、SH01との接合関係、SK07と間接的に接合関係がみられるものが存在する。

<SK07> (図10・図11・図14・図15)

調査区C区でSH01に削平され、遺構の規模は、約1.7m×約1.0mの楕円状の遺構である。SH01より全体に火を受けた赤茶色の埋土である。出土状況は、楕円状の縦約23cm×横約15cmの川原石の表面が磨かれた石で下部には潰れた痕跡が残る。その石は、縦長に立ち下部の三角部分やや尖っておりその部分が上に刺さった状態で、その石柱を中心に土器がドーナツ状に広がるような形で隙間無く帯び重なるような状態で出土した。石柱の最後の刺さった部分を最後に取り外す時には、周辺の土器はなくなるような状態であった。この石柱は、柱穴のような土坑が掘られた跡に差し込んでいるようである。

出土した土器の接合状況より3つの大きい甕27・28・45が割られていたことが分かった。出土状況は、任意に上面から接合関係の分かるものも考慮しながら順番に番号を付けて取り上げていったが、番号に近い部分は接合関係が良好であった。またあとから接合状況の分かるものを色で塗ると図11のように北東側と南西側よりに土器が散布してい

SK07



- 61.52m
1. 暗黒褐色粘質土 (赤茶色砂質土が全体に混じる)
 2. 黒赤色粘質土 (全体に赤い)
 3. 茶赤褐色砂質土 (2よりやや茶色)
 4. 灰赤色砂質土 (2よりやや灰色)
 5. 灰褐色粘土
 6. 黒褐色粘土 (赤茶色砂質土少量混じる)
 7. 褐色砂質土
- 0 1m (1/20)

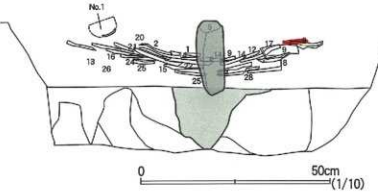
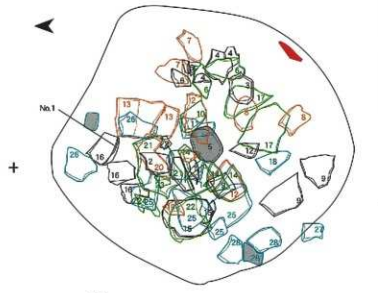


図10 SK07土層/出土状況

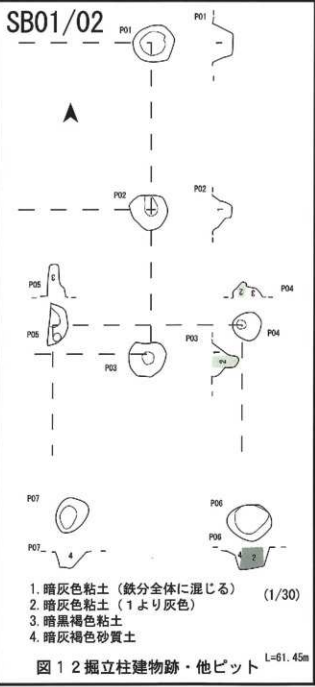


図12 掘立柱建物跡・他ピット

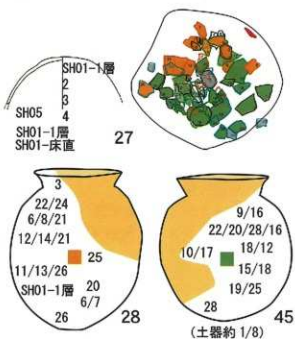


図11 土器の接合状況

る状況が分かり、土器の上下関係から考慮すると2人の人が土坑を挟んで(または1人が)同時または、ほとんど時間を空けずに45→28→27の底部を上面にして破砕したと考えられる。破片自体は、1個1個が大きく、接合状況からみて、石を中心に掘えて真上から甕を落させて土器を破片状にしたような祭祀遺構と考えられる。27の土器片の口縁部等は見つかっておらず、削平の影響もあるかもしれないが、もともとは甕の底部部分のみを再利用した可能性が高い。この28と45の土器体部表面には朱が塗布され体部には28には黒斑が、器壁は薄いながらも丈夫に製作された甕である。またこの土器の胴半下部は硬いが、胴上半部の土器片は、上部の土地利用により遺物の自身の色の退色や磨耗しており表面が一部磨耗し調整等は謙虚に見ることは出来ないが、表面は丁寧に磨きを施し、朱が一部塗られる。28と45は、非常に胎土、製作技法が似通っている。

接合部分の詳細を見ていくと口縁部と底部が著しく欠損している。その理由としては、口縁部が少ないのは、上部に暗渠が構築される際に削平されていると考えられ、底部については、焼成後、内側からの破砕痕跡が見受けられる部分があり、元来ない可能性もある。また土器の胴部斜め部分が顕著に欠けている部分については、石柱を中心に破砕しているが、持ち手側の土器片の胴部部分がやや上部になりその部分についても暗渠等のあとの時代の削平を受けている可能性がある。またSH01の上部層や床直遺物との接合関係が見られるものがあり、SH01との関連が考えられる。

その他の遺物としては、土師環1点が見ついている。44の土器は、破砕された土器よりもやや上部で北側に位置する部分から赤茶色い土師器の環が見つかる。この土器は祭祀の最後のお供え用の環であるかもしれない。この土器は、暗渠の影響もあり、磨耗し胎土もボロボロになって見つかった。そして石器と思われるものは、46のみである。

47は、石柱に使われていた石である。全体に磨かれており上面はやや土器片の色が付着していた。この遺構の時期は、SH01の廃絶後の古墳時代中期後半と考えられる。

第4節 中世以降の遺構・遺物・包含層遺物

<SB01建物> (図12)

A区に位置し、4層中にピットを確認した。建物の大半が調査区外へと拡がっていた。そのため総柱建物・側柱建物の判断は困難である。このため建物規模の復元も不可能である。A1-A2間・A2-A3間の柱穴間の距離は、約2.3mである。棟軸方向は、ほぼ正位である。検出できたのは、3つの柱穴に限られる。ただし、柱穴の平面形は基本的に隅丸方形に呈し、直径約30cm、深さ約15cmでP03のみ柱痕跡が残っていた。遺物等は見つからなかった。

<SB02建物>

A区に位置し4層中にピットを確認した。建物の大半が調査区外となり様子を知らぬ情報が少ない。柱間は、約2.3mでほぼ正位を保つ。SP04から小さい陶磁器片が出土し、中世代と考えられる。

<出土遺物>

A2から炭化物が見つかる。細い木質状のものである。

SP04から内面タタキ、外面は施釉あり。SP05から炭化物が見つかり、細い木質状のものである。

包含層遺物 (図15)

包含層遺物が多くコンテナ3箱分見ついている。

A区の包含層5層から、古墳時代の須恵器(坏・蓋)、古代の須恵器(坏・皿・甕)遺物が含まれる。48、49は古墳時代後期の須恵器である。須恵器底部片48～51である。55、56は9世紀後半の坏類でロクロが丁寧に成形されている。57、58は、須恵器の甕片である。西側の試掘調査部分では、79の粗製土師質の土鍾や81の9世紀後半の須恵器坏が出土している。

B区は土層状況からも一部削平が見られ、遺物は59のみで弥生土器の底部に穿孔を施した甗である。その他、試掘調査時には、土師器片が小片となって多数見つかり、鎌倉・室町時代の土師質銅片の体部片が見つかりしている。

C区の鉄片沈着層から弥生中期(壺・甕・高坏)、後期(甕・壺)、古墳時代の土師器(甕・製塩土器)須恵器、古代(甕・壺)、中国製陶磁器片、鎌倉時代の須恵器碗・土師皿の遺物や低石片が含まれていた。64は胎土が白く、外来系の無頸壺と考えられる。65は、小型丸底壺片と考えられる。68～70は、製塩土器片で器壁薄い。また旧耕作土中には、鎌倉時代の須恵器碗片74～76が多く見つかった。確認調査では、82の中世の中国製輸入青磁碗片が見つかりしている。

まとめ

今回、大きな発見は、集落域の発見である。西治地区では、これまで発掘調査があまりされていない地域でした。今回、西治地区では場整備事業に伴い事前に試掘調査を行い、確認することができました。試掘調査の結果においては、他に集落域の発見はなく、低位氾濫原であり、耕作地としての土地利用が古くからされており遺物もほとんど見つからず、現在の西治地区の集落域と被る可能性がある。他に、西治数軒ノ遺跡はやや標高が高い部分や北側高まり部分の西治二反田遺跡などにおいての発見があるのみである。

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構が検出された。

1. 弥生時代後期から古墳時代初頭

竪穴住居跡2基(SH-02、SH-09)土坑3基(SK-04、SK-06、SK-08)、(C区Pit1、Pit2)が見つかりしている。SH02は、SH05の住居の削平されており、遺物量も少なく機能時の様子が不明である。SH09は、遺物の出土状況から床直遺物は少量ではあるが、遺構の周縁側に遺物が集中し土器の体部片が多く見つかった。遺構の機能後に廃棄場所として利用されていた可能性が高い。土坑については、遺物がいずれも配置されていたかのように見つかりそれぞれ機能を持つ穴と思われる。全体から見つかりしている遺物としては、弥生時代中期の遺物も混じっておりそれ以前の古い遺物は見つかりしていない。

2. 古墳時代中期から中期後半

竪穴住居跡3基(SH-01、SH-05、SH-03)見つかりしている。この時期に該当する集落跡は、町内でも市川以西側からは見つかりしていない。以東側では、長日遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器片が多く見つかりしている。古墳時代中後期は、上大明寺遺跡や加治谷藪下五反畑遺跡ではカマドを伴う竪穴住居跡が見つかりしている。

住居跡から見つかる土器は、全体的に少なく、全体像の分かるものが非常に少なかった。遺物の量は、SH09が一番多かった。住居自体が機能時に状態ではなく、廃絶時に伴い上器等必要なものを持ち去っている可能性がある。土器については、胎土は、茶褐色のものが多く、礫状の砂粒子がたくさん含まれているものが約7割を占め在地の上器と考えられる。他地域のものと考えられるものは、明らかに色や胎土が異なるものが含まれている。土師器の器種構成は、甗、甕、坏類と器種構成が豊富となっている。

SH01とSH03は、住居内からの遺物が少なく棒状の炭が見つまっているが、焼失住居とするには土層状や遺構面状に焼土や炭がそれほど多く混じっていなかった。不完全な焼失住居か、一部資材を転用しているため焼失が少ない可能性も考えられる。

古墳時代の住居跡については、3基存在しこのうちSH01とSH03は住居の傾きが酷似し、また遺物の接合関係は3基ともに見られ機能時から、または廃絶時が非常に近い時期と考えられ、祭祀遺構のSK07とSH01の土器の接合状況からも祭祀遺構も住居跡の廃絶時に関わる重要な遺構と考えられる。

SH03の把手のある丈夫な甗で、市之郷遺跡出土の甗に酷似している。また個人を意識した器としての坏類が多く見つっています。また、1個体ではあるが、土鍾が見つっている。遺跡の近くには、市川が流れており、川で漁撈を行い生業としている様子も窺える。この遺跡よりやや西の段丘には数ヶ所古墳群があり、副葬品にはつるつるに磨かれた土鍾が見つっており、集落の人々と古墳に葬られた人々の関係も考えられる。他に製塩土器片が多く見つっており、土器片は二次焼成により火を赤変している。製品として運ばれ廃棄されたと考えられる。またこの土器片出土地点近くに用途不明の土師質の平らな遺物が見つっており、製塩土器の生業に関わるものか、今後の町内の発掘調査事例が増えることで解明することを期待したい。

3.祭祀遺構について

SK07は、住居跡(SH01)からの遺物が少なく、住居跡の遺物と祭祀遺構との接合関係も加え、住居の機能後の廃絶時に伴う祭祀と考えられる。そして祭祀の手順が上器の接合状況により明らかになった。また一部、土器の重なり具合が上下逆転している部分については、1/2の土器を作り検証実験を試みた結果である。土器片が非常に薄いため面子のように土器が跳ね上がり土器の上下関係が逆転することが検証できた。また手に持っている自分側の胴部については、上部に破片が上がる傾向があり、その部分が欠損していることも分かった。

まず、大きく楕円上に穴を掘り、石柱のように据え置き、北東、南西に2人で(または1人で)、北東側の方が先に石柱に向かって甗を破碎し、間を開けずに南西側の人も甗を石柱に向けて土器を破碎し、その後、甗の底部を上部にして蓋をするように割り、穴に焼土を入れて埋め戻し、坏を置き祭祀が終了したと考えられる。

4. 古代以降の以降について掘立柱建物跡

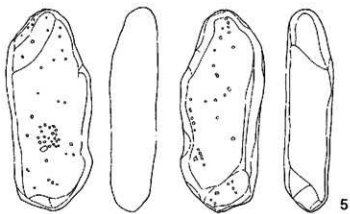
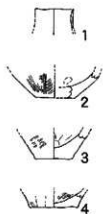
中世の建物跡（SB-01、SB-02）のピット跡が残るが削平のため不明ではあるが、ほぼ正位の建物跡である。他に中世12～13世紀後半の中国製の陶磁器片や須恵器片（山茶碗）や土碇片のような土塊が少量ではあるが見つかり、調査地点より西側の段丘状に中世代の建物跡が展開している可能性がある。後代の遺構も中世の建物跡を検出しただけでその後は土層状況より水田として利用されていた可能性が高い。包層遺物から古代の遺物も見つまっている。主にA区に点在していた。

今回、これらの集落跡から日常の生活の様子と非日常の祭祀という特別な遺構が見つかった。今後の集落の発掘と整理作業がすすむことで他の隣接する集落域との比較検討の材料となることを期待したいことでまとめとする。

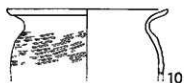
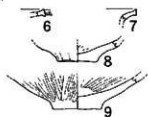
(参考文献)

- | | |
|-------------|--|
| 鎌谷 木三次 | 1934「市川中流域に於ける弥生土器遺」『考古学雑誌第24巻第9号』 |
| 田辺 昭三 | 1966『陶器古窯址群』平安学園考古学クラブ |
| 八幡遺跡調査会 | 1974『播磨八幡遺跡』 |
| 田辺 昭三 | 1981『須恵器集成』角川書店 |
| 寺沢 薫 | 1986『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 |
| 福崎町教育委員会 | 1994『楡谷遺跡』 |
| 福崎町史編纂専門委員会 | 1994『福崎町史第1巻』 |
| 森田 勉 | 1995「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『大宰府陶磁器研究』 |
| 福崎町史編纂専門委員会 | 1990『福崎町史第3巻』 |
| 大野 左千夫 | 1991「漁撈」『古墳時代の研究4生産と流通』雄山閣 |
| 立石 菜穂 | 1992「漁具と考古学」『考古学ジャーナル』no.344 |
| 松井 健 | 1999「甌形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 |
| 高野 陽子 | 2003「北近畿における弥生後期から古墳時代前期の土器様式」『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』(財)大阪文化財センター |
| 佐藤 隆 | 2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年—陶器編年の再構築に向けて—」『大阪歴史博物館 研究紀要』第2号 (財)大阪市文化財協会 |
| 兵庫県教育委員会 | 2005『市之郷遺跡—本文編一』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2006『清之口遺跡』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2007『加都遺跡Ⅱ』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2007『土師遺跡』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2007『柿坪遺跡—本文編一』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2007『柿坪遺跡—図版編一』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2008『豆腐町遺跡Ⅰ』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2010『市之郷遺跡Ⅱ』 |
| 兵庫県教育委員会 | 2011『市之郷遺跡Ⅲ』 |

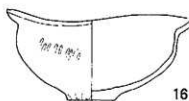
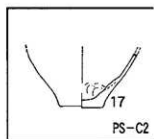
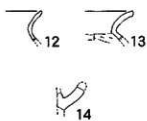
SH02



SK04



SH09



SH01

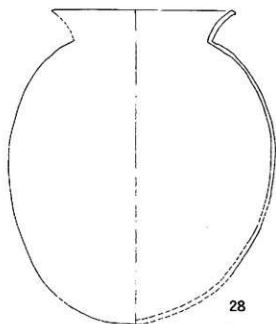
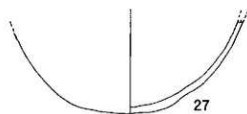
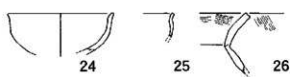
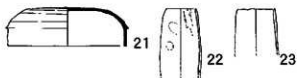
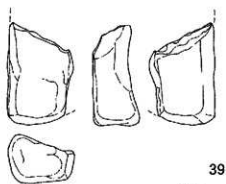
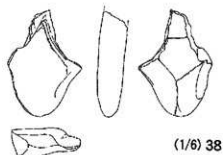
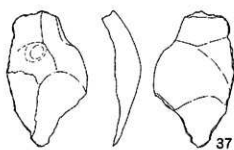
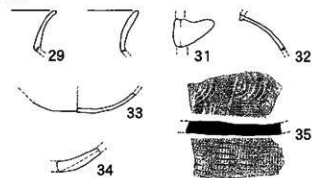


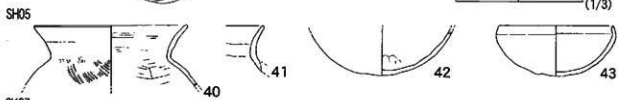
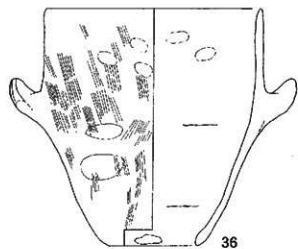
图 13

0 20cm (1/4)

SH03



0 10cm
(1/3)



SK07

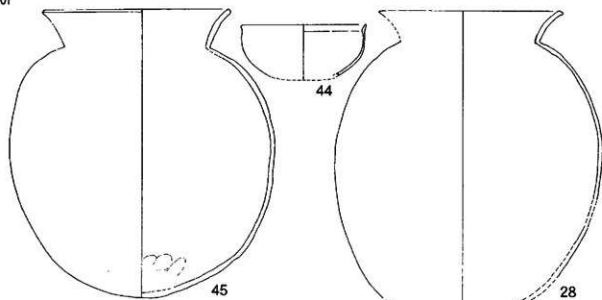
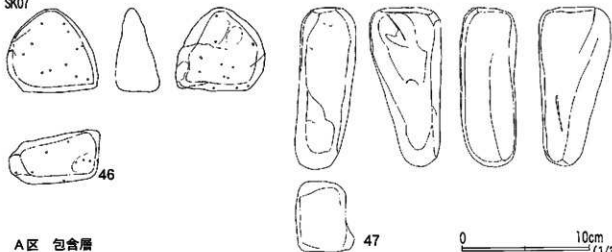


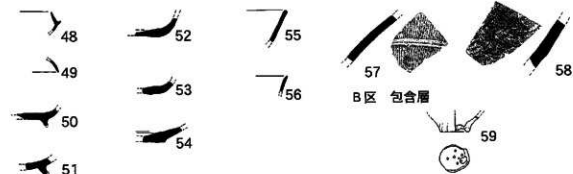
图 14

0 20cm
(1/4)

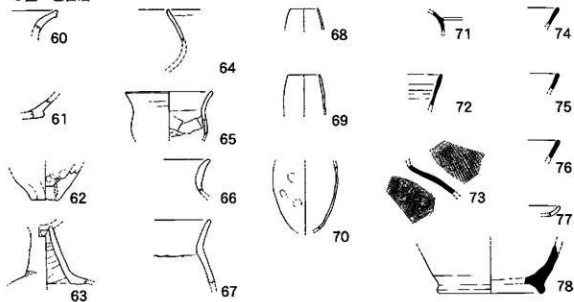
SK07



A区 包含層



C区 包含層



試掘・確認調査

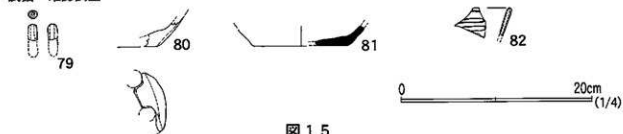


図 15

出土遺物観察表

平成23年度 西治地区ほほ場整備事業に伴う発掘調査

号	種別	形状	材質	出土	位置	総重量	備考	番号	種類	用途	容量	容量	容量	容量	容量	容量	容量	備考
1	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	28	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
2	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	29	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
3	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	30	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
4	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	31	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
5	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	32	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
6	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	33	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
7	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	34	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
8	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	35	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
9	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	36	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
10	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	37	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
11	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	38	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
12	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	39	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
13	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	40	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
14	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	41	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
15	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	42	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
16	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	43	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
17	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	44	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
18	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	45	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
19	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	46	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
20	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	47	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
21	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	48	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
22	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	49	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
23	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	50	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
24	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	51	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
25	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	52	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
26	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	53	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	
27	土師器	浅鉢	土師器	0.1c.m以下	底中央部	1.0	底中央部	54	土師器	底中央部	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	底中央部	

号	種別	部	品	構造	容量 (L)	最高回転数 (rpm)	機軸長さ (mm)	機軸径 (mm)	機軸材料	機軸形状	機軸寸法	備考
55	深溝球	球	角台番入型	角台番入型	1.7	1/5	良好	球				
56	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.6	1/20	良好	凸	凸台径: 1.0mm	凸台高: 0.2mm		
57	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	0.1	1/20	良好	凸				
58	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	0.4	1/20	良好	凸				
59	深溝球	球	凸台番入型 (0.0)	凸台番入型 (0.0)	1.7	1/8	良好	凸				
60	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	2.4	1/12	良好	凸				
61	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.6	1/20	良好	凸				
62	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.1	1/12	良好	凸				
63	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	6.0	1/8	良好	凸				
64	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.8	1/8	良好	凸				
65	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	4.0	1/8	良好	凸				
66	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	2.1	1/20	良好	凸				
67	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	7.0	1/8	良好	凸				
68	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.0	1/8	良好	凸				
69	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.8	1/8	良好	凸				
70	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	6.7	1/4	良好	凸				
71	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.4	1/8	良好	凸				
72	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.2	1/8	良好	凸				
73	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	2.9	1/20	良好	凸				
74	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.7	1/12	良好	凸				
75	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.6	1/12	良好	凸				
76	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.8	1/8	良好	凸				
77	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.1	1/8	良好	凸				
78	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	0.1	1/5	良好	凸				
79	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	1.0	1/2	良好	凸				
80	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.2	1/20	良好	凸				
81	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	2.2	1/12	良好	凸				
82	深溝球	球	凸台番入型	凸台番入型	3.0	1/8	良好	凸				

写真図版

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡

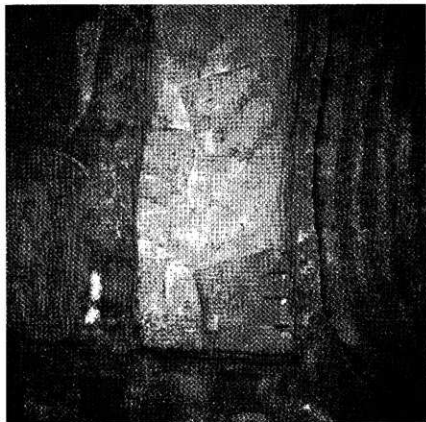


全景（南側より）



全景（東側より）

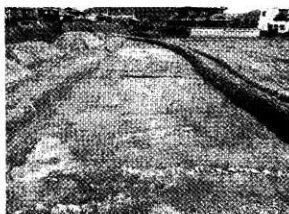
平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



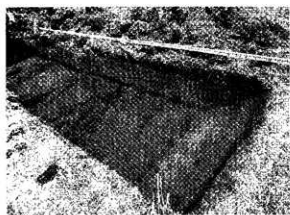
B・C区垂直写真



重機後の精査 (南側より)



重機後の精査 (南側より)



確認調査トレンチ4



確認トレンチ4土層

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



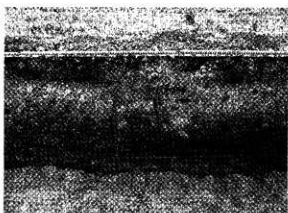
C区暗渠土層



B区土層



C区土層



A区土層



A・B区検出作業 (南側より)



A・B区検出 (南側より)



SH01 検出状況



SH01 南北土層

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



SH01南北土層西側



SH01東西土層



SH01東西方向土層



SH01とC区暗渠下



SH01不明土師質検出



SH01不明土師質



SH01完掘



SH01出土須恵器

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



SH02/05検出状況



SH02/05土層



SH02/05東側より



SH02/05北より



SH03検出作業



SH03甕出土

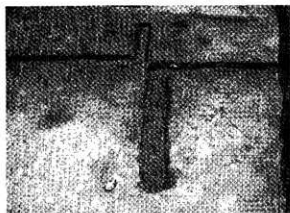


SH03甕出土状況



SH03甕出土状況

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



SH03土層



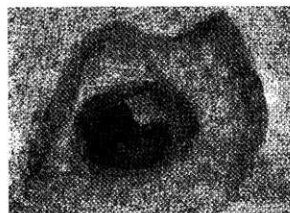
SH03土層北側より



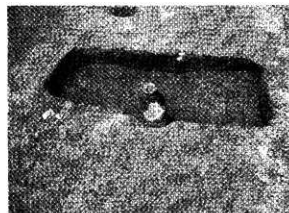
SH03完掘



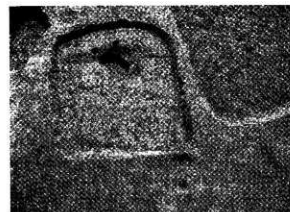
SH03土坑炭多い



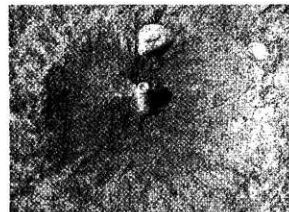
SH03土坑完掘



SK04出土状況



SK04完掘



SK06

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



SH01とSH01土器出土状況



SH07出土状況



SH07出土状況



SH07出土状況



SH07出土状況



SH07出土状況



SH07出土状況

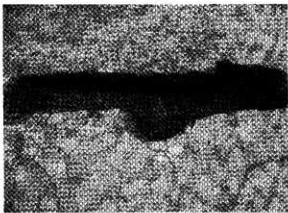


SH07出土状況

平成23年度 西治下代ノ下モ 遺跡



SK08土器出土状況



SH09土層



SH09完掘/土器出土状況



SH09土器出土状況



A区掘立柱建物跡検出

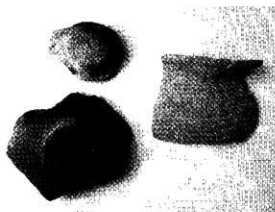


A区掘立柱建物跡

平成23年度 西治下代ノ下毛 遺跡



SH02 2 3 4 5



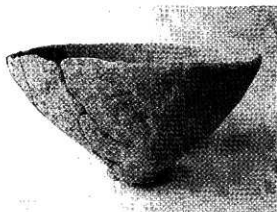
SH04 8 9 10



SH09 16



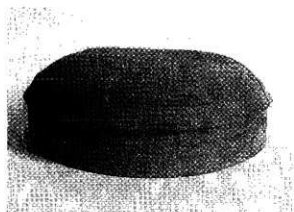
SK06 18



SK08 19



SK08 20



SH01 21



SH01 21内

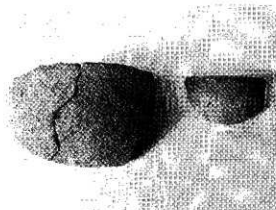
平成23年度 西治下代ノ下毛 遺跡



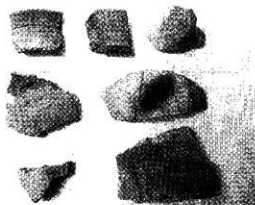
SH01 22 23



SH01 製塩土器片



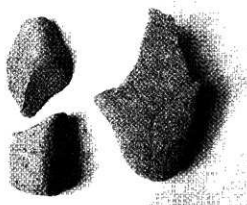
SH01 24 25



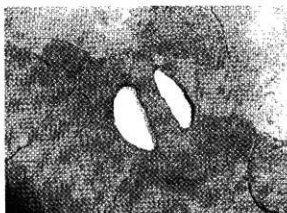
SH03 29~35



SH03甕



SH03 石器



SH03甕底内部

平成23年度 西治下代ノ下毛 遺跡



SK06 27



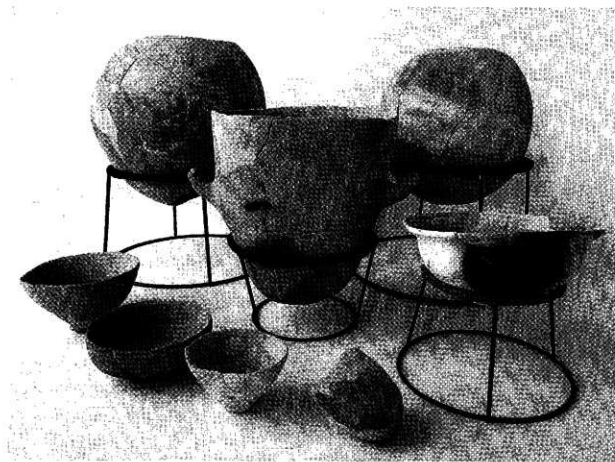
SK07 44



SK07 45



SK07 28



下代ノ下毛遺跡

報告書抄録

ふりがな	さいじしただいのしもいせき
書名	西治下代ノ下モ遺跡
副書名	平成23年度西治地区ほ場整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告11
シリーズ番号	11
編著者名	古田 陽
編集機関	福岡町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福岡町南田原3116-1 TEL0790 22-0560
発行年月日	2012年3月31日

所在地 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいじしただいのしもいせき 西治下代ノ下モ遺跡	ひょうごけんしんさきぐんふくおかちょう 兵庫県神崎郡福岡町 さいじ 西治669番1	28443	4100138	36° 41' 29"	137° 46' 12"	7月22日 ～ 9月8日 (25日)	約400㎡	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西治下代ノ下モ遺跡	集落跡	弥生時代後期 ～末期	竪穴住居跡・土坑・ピット	弥生土器(壺・甕・高坏・小鉢)・砥石ほか	祭祀土坑は、土坑の中心に石を柱状に突き刺し、この上に朱塗りの土師器の甕2個体を破砕し最後に甕の底でふたする儀式を行った跡が見つかった。			
		古墳時代中期 ～後期	竪穴住居跡・祭祀遺構・土坑	土師器(甕・甗・製塩土器・坏・皿)・須恵器(坏・甕)・土唾・砥石ほか				
		古代・中世	掘立柱建物跡	中国製青磁碗・土師器・須恵器ほか				
要約	西治下代ノ下モ遺跡は、弥生時代後期から末期、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡・土坑などの集落跡を確認した。古墳時代の住居跡に関連した土器を破砕する祭祀土坑が見つかった。							

2012年3月10日 印刷

2012年3月25日 発行

西治下代ノ下毛遺跡発掘調査報告書
福岡町埋蔵文化財調査報告11

著作権 兵庫県神崎郡福岡町南田原3116-1

発行者 福岡町教育委員会

印刷者 クリヤ印刷所



